

高等学校単位の大学見学会プログラムに関する参加高校生の評価

三井 規裕, 森川 修, 尾室 真郷 (鳥取大学)

本研究の目的は鳥取大学入学センターが、年間を通じて実施している高大連携事業の 1 つである大学見学会を対象とし、参加した高校生がプログラムをどのように評価したかを検証することである。アンケート調査の結果、参加した高校生は概ねプログラムを評価していたものの、進学先候補であるかの違いによって評価は異なることが示唆された。また、自由記述を分析した結果、進学先候補群は具体的な情報を得て関心を広げていたこと、わからない群は大学教員や卒業生の話を聞いて進路の参考にしていったこと、非進学先候補群は大学というところがどのようなところか知れたことを評価していたことが示唆された。

キーワード：高大連携，大学見学会，進学先候補の違い，計量テキスト分析

1 はじめに

1.1 高大連携の現状

1999 年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、高等学校と大学の連携を拡大し、個人の持つ多様で特色ある能力や個性を効果的に伸ばしていく必要があることが述べられている。

高等学校と大学の連携（以下、高大連携）の必要性が指摘されて以降、大学の授業や講座への参加、大学が実施するイベントや大学訪問など高校生の進路検討を促す取り組みが多く提供されている。例えば、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室（2007）の調査によると、大学の授業に参加する高校生の学修を単位として認定する高等学校は 1999 年の 22 件から 2006 年は 428 件と増加している。また、単位認定は行わないものの科目等履修生として大学の授業や公開講座を活用する取り組みは、1999 年の 15 件から 2006 年は 991 件と大幅に増加していることが報告されている。つまり、大学の授業や講座に参加するという形態の高大連携は拡大しており、高校生が卒業後の進路を考える機会として利用することができるようになってきていると考えられる。

大学の授業や公開講座に参加する以外に進路を検討する機会として、高等学校単位で大学を訪問する見学会（以下、大学見学会）や大学が実施するイベントへの参加がある。例えば、長谷川ほか（2004）は高等学校の依頼による大学見学会を実施しており、体験学習を中心とした高大連携教育活動を実施している。また、大野ほか（2021）は高校生が先端研究に触れることができるよう 1 回で完結する講演と大学生によるプレゼンテーションを組み合わせたフォーラムを実施

している。このフォーラムの効果を検証した結果、自らの意思で参加した高校生は、勉強意欲や大学進学意欲を高めていたことを明らかにしている。つまり、進路を検討する機会は多くなっており、大学教員や大学生を通じて大学での学びや生活について情報を得ることができていると考えられる。高等学校自体も高校生の関心を意識した進路指導を行なっている（濱中, 2016）ことから、大学見学会や大学が実施するイベントは高等学校の進路検討の機会として活用されていると考えられる。

1.2 問題意識と研究の目的

答申を受けて高大連携の取り組みが進み、高校生が進路を検討する上で大学に接触する機会は多くなっている。こうした取り組みは、高校生の進路選択の参考となっている。また、取り組みの効果についても検討されており高大連携を進めていく上で参考となる知見が少しずつ蓄積されているといえる。

しかしながら、高等学校の依頼による大学見学会のように頻繁に実施される取り組みの評価は十分に検討されているとはいえない。こうしたプログラムは高校生の進路選択に必要なではあるものの、大野ほか（2021）は大学見学会が高校生の興味の有無に関わらず、授業の一環として実施されることに課題があると述べている。

そこで、本研究では鳥取大学入学センターが、年間を通じて実施している高大連携事業の 1 つである大学見学会を対象とし、参加した高校生がプログラムをどのように評価したかを検証することを目的として設定する。参加した高校生の評価を検証することで、大学見学会が進路検討にどの程度参考になったかを明らか

にすることができる。その結果、大学は高大連携事業の改善を考えることができ、より適切なプログラムの検討に活かすことができると考えられる。

2 研究の対象と方法

2.1 大学見学会の概要

表1に実施した大学見学会のプログラムを示す。

鳥取大学にとって大学見学会は、地方国立大学の魅力を知り、高校生の進路選択の参考にすることを目的に実施されている。高等学校単位で大学を見学することから、参加する高校生は必ずしも鳥取大学への進学を検討しているわけではない。大学見学会に参加する高校生の多くは、1, 2年生が中心であり、卒業後の進路についてまだ検討している状態である。

高等学校にとっては大学見学会を通じて高校生に卒業後の進路について考えるきっかけを与えることを目的にしている。

鳥取大学で実施する大学見学会のプログラムは、進学講話、大学説明、施設見学、食堂体験を基本としている。進学講話では、大学に進学する意義や目的意識の重要性について説明し、そのために高校時代に何に取り組むべきかについて説明している。また、大学説明では、鳥取大学の特色、各学部の研究内容、学生生活の様子、就職状況、国家資格の合格状況についてわかりやすく説明するようにしている。さらに、鳥取キャンパスの場合、施設見学として農学部や工学部の施設を中心に、鳥取大学のキャンパス内を散策し各施設の特徴について簡単に説明する。学生食堂の利用は在学生のお昼の休憩時間と重ならないように配慮しながら利用できる。ただし、高等学校によって滞在時間に

表1 大学見学会プログラム例

時間	大学見学会プログラム
9:30	鳥取大学 鳥取キャンパス到着
9:40~10:40	施設見学 (学部棟や農場等の建物の外から見学)
10:40~11:20	講義 (大学説明)
11:20~12:00	食堂体験
12:00~13:00	共通教育棟の見学
13:00~14:30	卒業生の話、今日の振り返り
14:30	鳥取大学 鳥取キャンパス出発

違いがあるため、状況に応じて内容は変更している。これ以外にも高等学校側からの要望として、在学生による説明や在学生との交流がある。この要望については、在学生とスケジュールの調整ができ、協力しても

らえる時だけ別途対応しているのが現状であり、必ず実施できるわけではない。

2.2 対象者と調査方法

大学見学会に参加した高校生が、プログラムをどのように評価するかを明らかにするため、2022年7月から8月に6回実施された大学見学会の参加者295名を調査対象とした。なお、この時期の参加者は全て県外の高校生であった。具体的には、大学見学会終了直後 Web 上でアンケート調査を実施し、参加した高校生は大学見学会のプログラムがどの程度参考になったかを回答した。質問は、「1. 大学説明は鳥取大学への進学を検討する上で参考になりましたか」、「2. 大学進学講話は大学進学を考える上で参考になりましたか」、「3. 地方国立大学の魅力を感じることはできましたか」、「4. 学内見学は大学の施設・設備を知る上で参考になりましたか」、「5. 学食の利用は大学での生活を想像する上で参考になりましたか」であり、5:そう思う~1:そう思わないの5件法で回答を求めた。また、「6. 鳥取大学への進学希望」について、進学先として検討している・進学先として検討していない・まだわからないの中から回答を求めた。さらに、自由記述として「7. 大学見学会に参加してよかったこと」について回答を求めた。なお、質問項目は共著者間で協議し、決定した。

倫理的配慮の観点からアンケート実施の目的、収集したデータの保管方法、利用目的について説明した。また、アンケートの回答結果を学術的な場で利用することについて回答者から同意を得るようにした。

2.3 分析方法

アンケートに回答のあった295名の内、同意を得た260名(88.1%)を分析対象とした。

分析方法は以下の通りであった。まず、質問1から5の回答を集計し、全体の傾向を確認した。次に質問6の回答を使用し、鳥取大学を「進学先として検討している」を進学先候補群、「まだわからない」をわからない群、「進学先として検討していない」を非進学先候補群とした。これら3つの群と質問1から5を使用して χ^2 検定を実施し、進学先候補との関連を検討した。最後に、3群を変数とし、前述した質問7「大学見学会に参加してよかったこと」の自由記述を用いて計量テキスト分析手法の1つである対応分析を行った。対応分析とは、変数ごとに特徴的な語を抽出して分析する場合に用いられる(樋口ほか,2022)。

分析に入る前に、前処理として不要な改行の削除、

強制的に抽出する語として「学食」と「大学生活」を指定した。次に、質問7の自由記述を使用し、計量テキスト分析ソフト KH Coder (樋口,2014) を用いて、次の手順で分析を行った。①高校生の自由記述と3群を変数として付与した Excel ファイルを準備 ②準備したファイルを KH Coder に取込 ③動詞と形容詞の抽出を除外し、使用する変数を指定 ④読み込んだデータから対応分析(最小出現数3, 最小文書数1, 使用する語の数 45)を実行した。その後、対応分析の図上に付置された語の回答文を KWIC コンコーダンスで検索し、原文を確認しながらどのような特徴があるのかを分析した。

3 評価

3.1 質問1から5の結果と考察

参加した高校生は、大学見学会のプログラムを進学検討の参考になったと回答していた(表2)。質問1から5のいずれも平均値は5段階中4以上であった。つまり、高校生は実際に大学を訪問し、大学の説明や施設を見学することで、大学生の生活の雰囲気を一時的に感じていたと考えられる。ただし、いずれも天井効果が見られたことから、このようなプログラムの評価は回答が偏る可能性があると考えられる。そのため、分析は回答の偏りがあることに留意しながら進める。

表2 質問1から5の結果

	平均値	標準偏差
1 鳥取大学の大学説明は鳥取大学への進学を考える上で参考になりましたか?	4.38	0.928
2 大学進学講話は大学進学を考える上で参考になりましたか?	4.63	0.746
3 地方国立大学の魅力を感じることができましたか?	4.49	0.778
4 学内見学は大学の施設・設備を知る上で参考になりましたか?	4.41	0.894
5 学食利用は大学での生活を想像する上で参考になりましたか?	4.56	0.781

n=260

3.2 進学先候補有無の結果と考察

次に、鳥取大学進学先候補群(30名)、わからない群(183名)、非進学先候補群(47名)の3群に分け、質問1から5の回答と関連があるかを検討した。クロス集計を行ったところ、期待度数が5以下のセルがあったことから、 χ^2 検定(イエーツの連続性修正)を行った。その結果、3群と「地方国立大学の魅力を感じることができましたか」($\chi^2=28.040$, $df=8$, $p<.01$, $V=.232$)に関連が見られた(表5)。

残差分析の結果、表5の「どちらとも言えない」は進学希望のわからない群の割合が小さく、非進学先候補群の割合が大きかった。また、「そう思う」は非進学先候補群の割合は小さかった。つまり、進学先かどうかもまだわからない高校生は、大学教員から地方国立大学に関する講義を受ける、施設・設備など学びの環境を見学することで自身の進路の参考にしていた可能性がある。また、訪問先の大学を進学先として検討していない高校生は、同様の体験をしても自身の進路の参考になるとは考えない傾向があると考えられる。こうした傾向があるとするならば事前に高等学校と大学見学会に関する打ち合わせを行い、参加する高校生の進路検討の状況を把握しておくことが望ましいと言える。そうすることで、大学見学会プログラムを高校生の進路検討状況に即した内容に改善していくことができると考えられる。

なお、3群と表3の「大学説明は鳥取大学の進学を考える上で参考になりましたか」($\chi^2=5.560$, $df=8$, $p=.696$, $V=.103$)、表4の「大学進学講話は大学進学を考える上で参考になりましたか」($\chi^2=7.119$, $df=8$, $p=.524$, $V=.117$)、表6の「学内見学は大学

表3 大学説明は鳥取大学の進学を考える上で参考になったか

	そう思わない	どちらかと言え ばそう思わない	どちらとも 言えない	どちらかと言え ばそう思う	そう思う	合計
進学希望	度数 1	0	0	6	23	30
	% 0.38	0.00	0.00	2.31	8.85	11.54
	調整済み 残差 0.086	-0.513	-1.982	-0.909	2.109	
わからない	度数 5	2	18	50	108	183
	% 1.92	0.77	6.92	19.23	41.54	70.38
	調整済み 残差 -0.496	0.921	-0.447	0.224	0.086	
非進学先候補	度数 2	0	9	14	22	47
	% 0.77	0.00	3.46	5.38	8.46	18.08
	調整済み 残差 0.517	-0.667	2.176	0.489	-1.853	
合計	度数 8	2	27	70	153	260
	% 3.08	0.77	10.38	26.92	58.85	100

**p<.01, *p<.05

表4 大学進学講話は大学進学を考える上で参考になったか

	そう思わない	どちらかと言え ばそう思わない	どちらとも 言えない	どちらかと言え ばそう思う	そう思う	合計
進学希望	度数 1	1	0	4	24	30
	% 0.38	0.38	0.00	1.54	9.23	11.54
	調整済み 残差 -0.155	0.849	-0.815	-0.718	0.721	
わからない	度数 7	2	2	30	142	183
	% 2.69	0.77	0.77	11.54	54.62	70.38
	調整済み 残差 -0.027	-0.900	-1.503	-1.087	1.702	
非進学先候補	度数 2	1	3	13	28	47
	% 0.77	0.38	1.15	5.00	10.77	18.08
	調整済み 残差 0.161	0.363	2.460	1.886	-2.618	
合計	度数 8	2	27	70	153	260
	% 3.85	1.54	1.92	18.08	74.62	100

**p<.01, *p<.05

表5 地方国立大学の魅力を感じることができたか

		そう思わ ない	どちらかと言え ばそう思わない	どちらとも 言えない	どちらかと言え ばそう思う	そう思う	合計
進学 希望	進学先候補 度数	0	1	0	6	23	30
	%	0.00	0.38	0.00	2.31	8.85	11.54
	調整済み 残差	-0.728	1.709	-1.491	-1.315	1.853	
わからない	度数	2	1	▼5	60	115	183
	%	0.77	0.38	1.92	23.08	44.23	70.38
	調整済み 残差	-0.900	-0.634	-3.539 **	1.298	0.861	
非進学先 候補	度数	2	0	△11	13	▼21	47
	%	0.77	0.00	4.23	5.00	8.08	18.08
	調整済み 残差	1.672	-0.667	5.437 **	-0.449	-2.560 **	
合計	度数	4	2	16	79	159	260
	%	1.54	0.77	6.15	30.38	61.15	100

**p<.01, *p<.05

表6 学内見学会は大学の施設・設備を知る上で参考になったか

		そう思わ ない	どちらかと言え ばそう思わない	どちらとも 言えない	どちらかと言え ばそう思う	そう思う	合計
進学 希望	進学先候補 度数	2	0	1	11	16	30
	%	0.77	0.00	0.38	4.23	6.15	11.54
	調整済み 残差	1.211	-0.362	-1.014	0.952	-0.699	
わからない	度数	3	0	11	52	117	183
	%	1.15	0.00	4.23	20.00	45.00	70.38
	調整済み 残差	-2.069	-1.545	-1.885	-0.446	2.379	
非進学先 候補	度数	3	1	9	13	21	47
	%	1.15	0.38	3.46	5.00	8.08	18.08
	調整済み 残差	1.450	2.133	3.078	-0.262	-2.243	
合計	度数	8	1	21	76	154	260
	%	3.08	0.38	8.08	29.23	59.23	100

**p<.01, *p<.05

表7 学食利用は大学での生活を想像する上で参考になったか

		そう思わ ない	どちらかと言え ばそう思わない	どちらとも 言えない	どちらかと言え ばそう思う	そう思う	合計
進学 希望	進学先候補 度数	1	1	3	6	19	30
	%	0.38	0.38	1.15	2.31	7.31	11.54
	調整済み 残差	0.849	1.709	0.815	-0.374	-0.643	
わからない	度数	2	0	10	43	128	183
	%	0.77	0.00	3.85	16.54	49.23	70.38
	調整済み 残差	-0.900	-2.189	-1.080	0.478	0.794	
非進学先 候補	度数	1	1	4	10	31	47
	%	0.38	0.38	1.54	3.85	11.92	18.08
	調整済み 残差	0.363	1.178	0.604	-0.256	-0.408	
合計	度数	4	2	17	59	178	260
	%	1.54	0.77	6.54	22.69	68.46	100

**p<.01, *p<.05

の施設・設備を知る上で参考になりましたか」 ($\chi^2=11.911$, $df=8$, $p=.155$, $V=.151$), 表7の「学食利用は大学での生活を想像する上で参考になりましたか」 ($\chi^2=1.006$, $df=8$, $p=.998$, $V=.044$) には関連は見られなかった。

3.3 対応分析の結果と考察

次に、大学見学会に参加して良かったことに関する自由記述 (最大文字数 189, 最小文字数 3, 平均文字

数 16.1) を使った計量テキスト分析による対応分析の結果について述べる。

対応分析 (図1) は、原点から離れた語に特徴がある。原点とは、Y 軸・X 軸上の0から線を引き、図上で交わる地点のことである。原点付近にある語は変数の値に関係なく、満遍なく出現している語であることから特徴のない語である。原点から離れて付置されている語は、なんらかの特徴がある語である。以下、3変数に特徴的な語について述べる。

まず、進学先候補群は、学部の情報や施設等の見学会を通じて進路の参考にしていただくと考えられる。例えば、原点から右に付置された「鳥取大学は進学先として検討している」に特徴的な語は「農学部」「工学部」「設備」「情報」等であった。原文を確認すると以下の記述が見られた。

僕は鳥取大学の**農学部**を志望していて、**獣医学科**や**生命**など色んな**農学部**の分野に興味を持っていたのですが、今回の見学会に参加してみて、**工学部**の就職率の高さや大手企業への就職率などを見て、**工学部**にも魅力を感じました。

実際に大学に訪れたことによって大学の**雰囲気**や**設備**、特色や周りの物件情報など今まで知らなかった為になる**情報**をたくさん知ることができたので行ってよかった。

農学部の中でも文系の人がいったり、**工学部**で**医学部**と**共同**の勉強をしているのをしれてよかった。

つまり、進学先候補群にとっては、こうした見学会への参加は自身の進学先候補の具体的な情報を得ることに関心を広めることにつながると考えられる。こうした点について大野ほか (2021) は学年の違いがあるものの自発的に参加した高校生の方が影響を受ける傾向があることを指摘している。したがって、進学先候補群にとって希望する大学を見学することは自身の視野を広げ、具体的な情報を得ることで進路検討に役立っていると考えられる。

次に、わからない群は、卒業生の話を聞き大学という場を体験でき、各学部の研究を知れたことで進路について考えるきっかけを得ていたと考えられる。例えば、原点から左上に付置された「まだわからない」に特徴的な語は「学部」「体験」「研究」等であった。原文を確認すると以下の記述が見られた。

4 まとめと今後の課題

本研究の目的は、高大連携事業の1つである大学見学会に参加した高校生がプログラムをどのように評価するかを検証することであった。

まず、大学見学会に参加した高校生は、概ね進路の検討の参考になっていることが明らかとなった。

次に、進学先候補群・わからない群・非進学先候補群の3群とアンケート回答の関連を検証した結果、「3. 地方国立大学の魅力を感じることができましたか」に関連が見られた。進学先かどうかまだわからない高校生は、大学教員から地方国立大学に関する講義を受ける、施設・設備など学びの環境を見学することで自身の進路の参考とし、訪問先の大学を進学先として検討していない高校生は、同様の体験をしても自身の進路の参考になるとは考えない傾向が見られた。

さらに、具体的に何を良かったと感じていたかを明らかにするため3群と自由記述を分析した。その結果、進学先候補群は具体的な情報を得ることで関心を広めていたこと、わからない群は高等学校の卒業生の話聞き、訪問先の大学でしかできない研究を知ることで、訪問先の大学を含め自身の進学を検討する機会となっていたこと、非進学先候補群は訪問先の大学に関心を持つというよりも、大学という場がどのようなところなのかを知れたことを評価していたことが示唆された。

参加した高校生は全体的に進路検討の参考になったと回答していた。しかしながら、参加した高校生の進学先候補の違いによって、参考になったことを表す特徴的な語の割合は異なっていた。

このような違いは、今後大学見学会を行う上で参考にすることができる。例えば、依頼のあった高等学校と見学会の内容だけでなく、どのような高校生が参加するのかを聞くことで高等学校と大学両方にとって意義のある活動にできると考えられる。

最後に今後の課題について述べる。

まず、本研究で実施した調査の回答はいずれも天井効果が見られた。現状の大学見学会プログラムを概ね評価していると考えられるものの、大学見学会のプログラム評価の回答は偏る可能性があることを十分に考慮できていなかった。こうした理由からプログラムを構成する要素の改善につながる情報を十分に得ることができなかった。また、今回の調査対象者は県外の高校生であった。このことから県内の高校生を対象とした場合、結果が異なることも考えられる。今後は県内外、学年等の属性情報を取得し、継続的に調査を行っていくことでより高校生と大学にとって有益な知見を積み上げていく必要がある。

参考文献

- 文部科学省中央教育審議会（1999年12月16日）。「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」文部科学省https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm（2022年8月5日閲覧）。
- 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室（2007年6月）。「高等学校教育の改革に関する推進状況（平成19年度版）第1章 高等学校教育の改革に関する推進状況（概要）」文部科学省https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/2007/08050801/001.htm（2022年8月5日閲覧）。
- 長谷川明・桃井龍慈・齋藤正博（2004）。「八戸工業大学における高大連携教育の実践と課題」『工学教育』52(1), 88-92.
- 大野真理子・河西奈保子・溝口侑（2021）。「高大連携活動が高校生に与える影響について-「都立高校生のための先端研究フォーラム」の事例をもとに-」『大学入試研究ジャーナル』31, 49-55.
- 濱中淳子（2016）。「高大接続改革と教育現場の断層-「善意」の帰結を問う-」『教育学研究』83, 29-40.
- 樋口耕一・中村康則・周景龍（2022）。「動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析-」ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一（2014）。「社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-」ナカニシヤ出版.